

第四十八圖 赤銅合子 同ツテ右 圖サチ

全高一五〇 徑八八 重三三〇 瓦

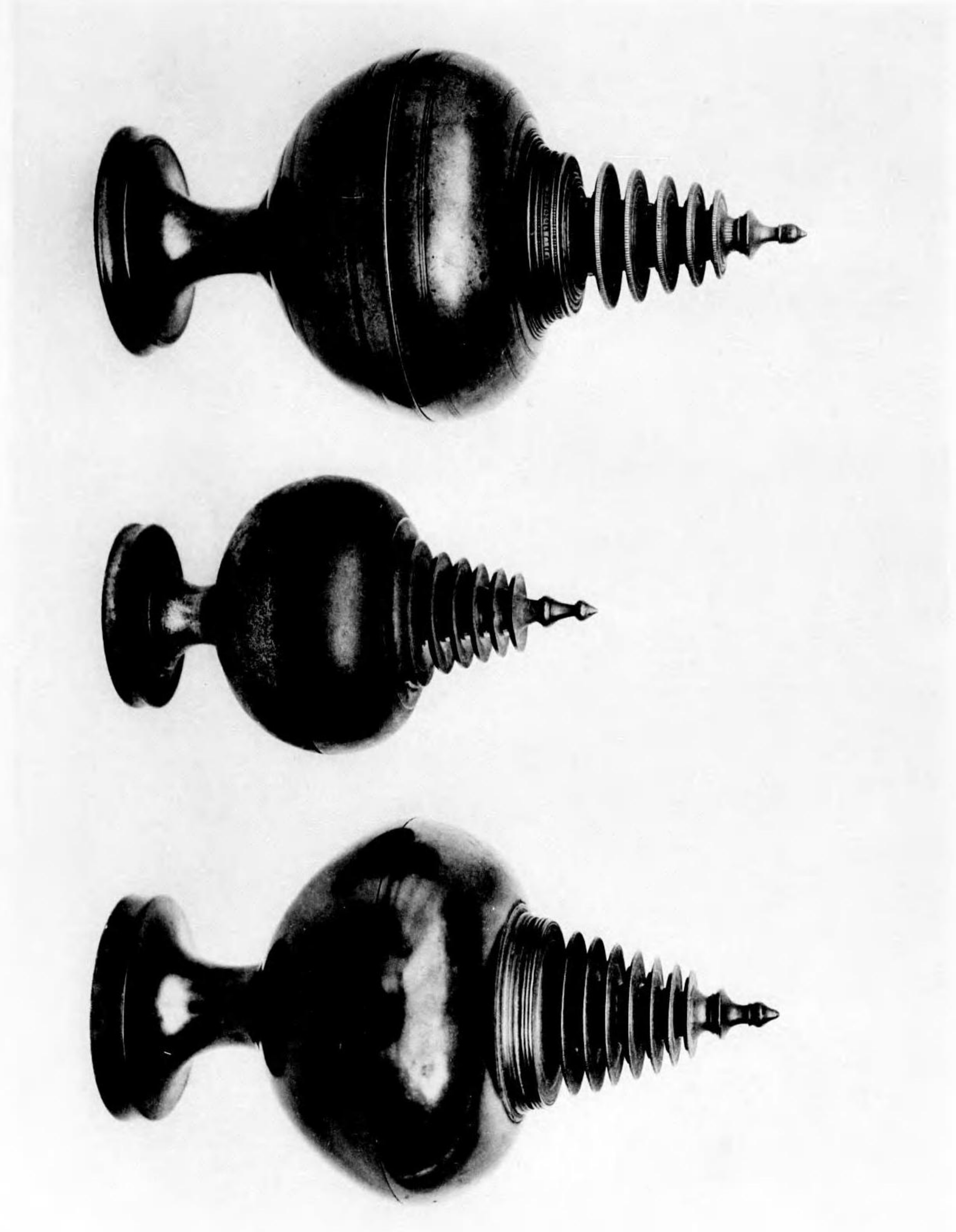
佐波利合子 中央 圖サチ

全高一〇九 徑六五 重二二〇 瓦

黄銅合子 同ツテ左 圖サチ

全高一五九 徑八五 重四一〇 瓦

共に柱脚ある蓋鏡に相輪形紐をつけたもので、前掲金銅大合子の形と大同小異である。たゞ彼の三重相輪なるに對し、之は七重、五重に作り、その相輪も彼に比べて甚だ裝飾的である。就中向つて左の黄銅合子の如きは、その刻に綠瑠璃を嵌め、各輪に金銀の裝飾をなす等甚だ精妙を極む。又これらの製作を見るに赤銅合子と黄銅合子とは柱脚、身・蓋・相輪とを各別に作り、組立嵌止せるものであるが、佐波利合子のみは蓋と相輪、身と柱脚とを一連に抜き出してゐる。



第一層の銅を削りて成る。

あるは、清國聯合各社の銅製器、或は銅製器
 等、銅製器等も亦銅製器、銅製器等も亦銅製器、
 其の銅製器も亦銅製器、銅製器等も亦銅製器、
 各社に銅製器の銅製器も亦銅製器、銅製器等も亦銅製器、
 了式の銅製器も亦銅製器、銅製器等も亦銅製器、
 の銅製器も亦銅製器、銅製器等も亦銅製器、
 三層の銅製器も亦銅製器、銅製器等も亦銅製器、
 銅製器も亦銅製器、銅製器等も亦銅製器、
 此の銅製器も亦銅製器、銅製器等も亦銅製器、

全書一冊の銅製器も亦銅製器、銅製器等も亦銅製器、

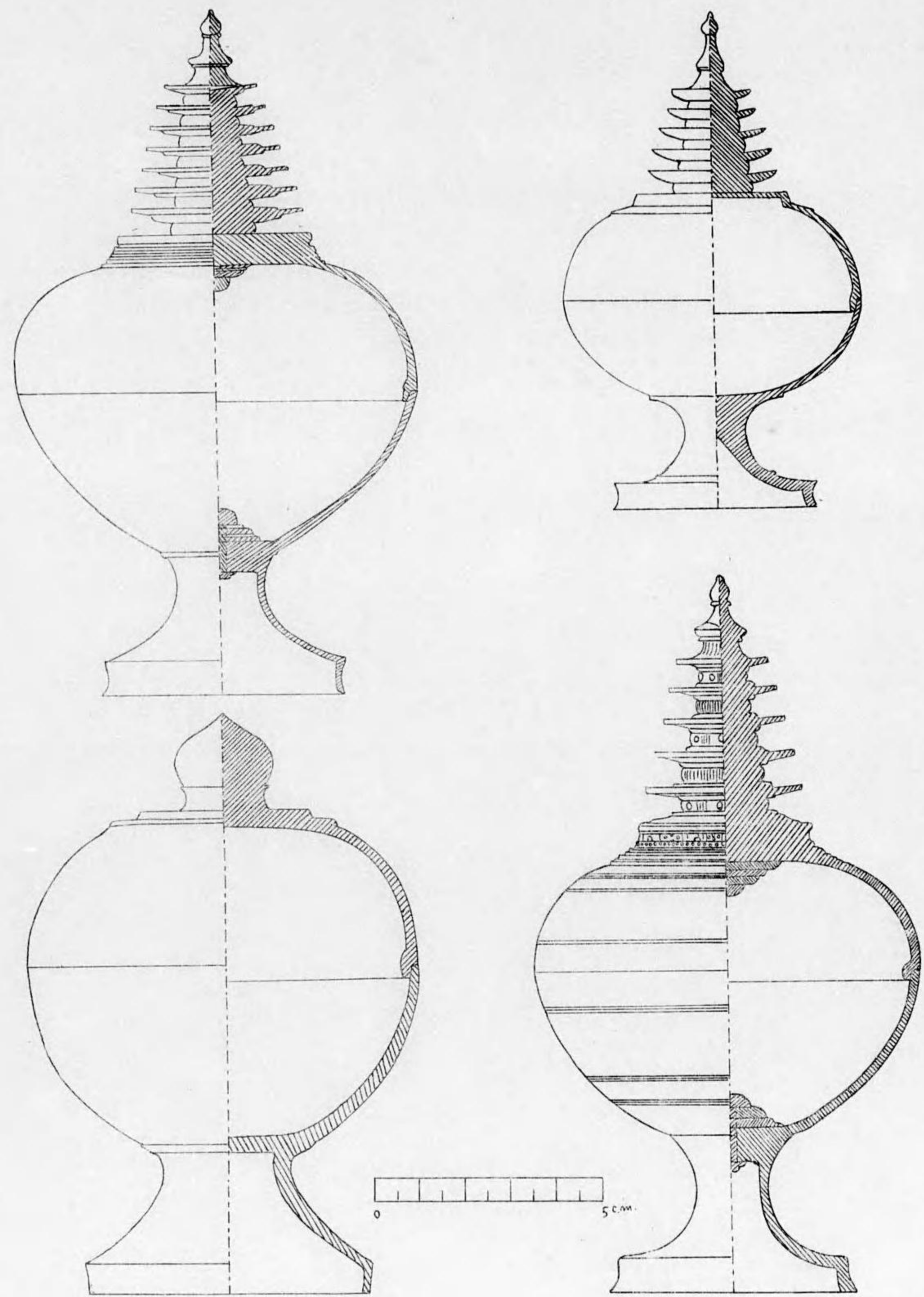
銅製器も亦銅製器、銅製器等も亦銅製器、

銅製器も亦銅製器、銅製器等も亦銅製器、

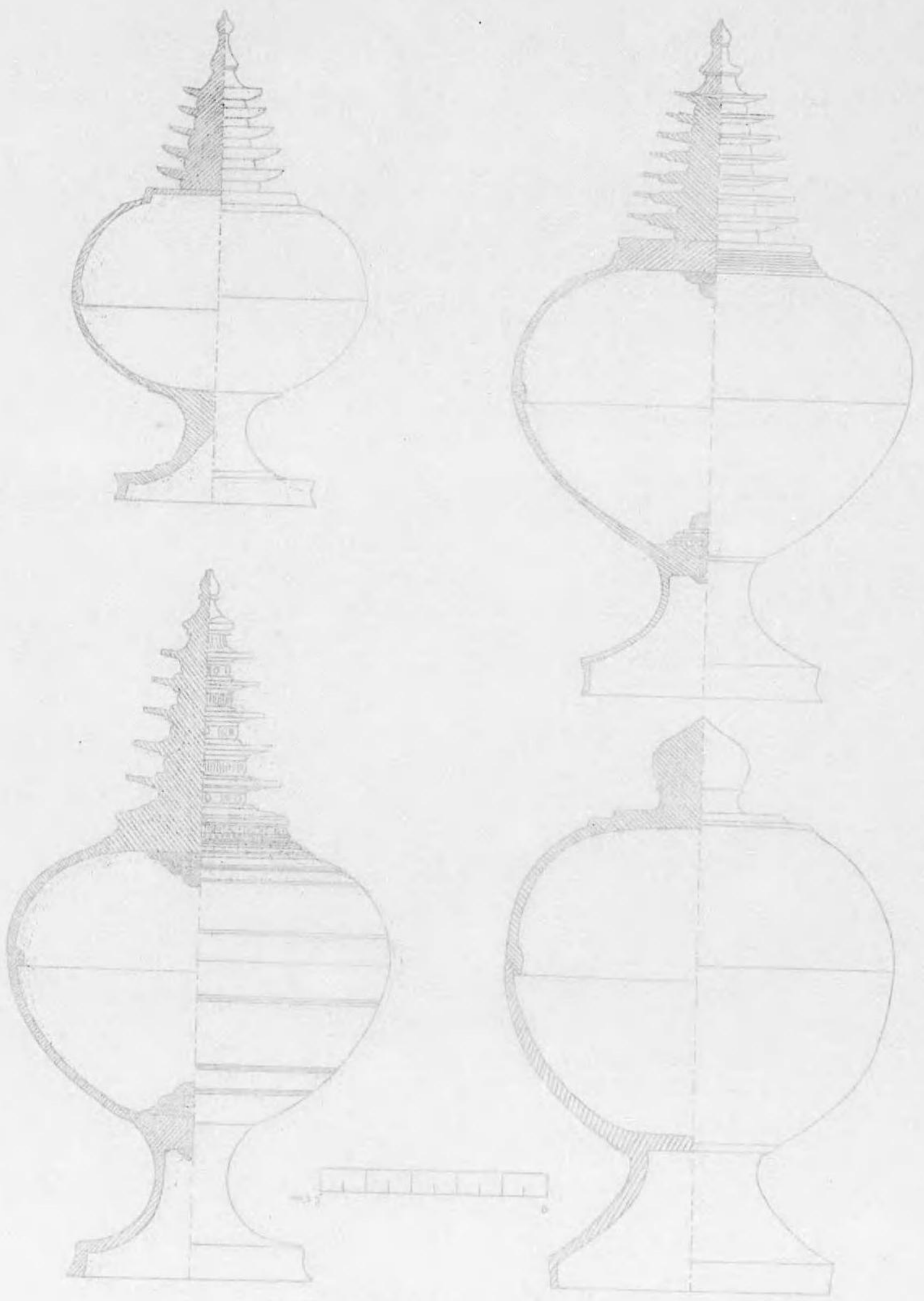
銅製器も亦銅製器、銅製器等も亦銅製器、

銅製器も亦銅製器、銅製器等も亦銅製器、

銅製器も亦銅製器、銅製器等も亦銅製器、



寸原 圖測實子合銅金・子合銅赤・子合銅黃・子合理波佐



十 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

金銅合子は寶珠鈕、赤銅合子は寶瓶鈕を
つけ、外見も異なるが、その製作に至つては
前者は蓋と寶珠鈕、身と柱脚とをそれ／＼
一連にして挽いたもの、後者は蓋と瓶鈕、
身と脚とを別々につくり、蓋は鍍止、身は
織付けしてゐるらしい。

上圖は三合子の側面、下圖は金銅合子と
赤銅合子二合ノ一との蓋を外したところであ
る。

第四十九圖 金銅合子 石 瓦
總高二三種 徑八種
赤銅合子二合ノ一 中 瓦
總高二三種 徑七六種
赤銅合子二合ノ二 左 瓦
總高一五種 徑七三種

第四十五圖 金 鳳 各 一 件

第二三號 新 八 號

第四十六圖 金 鳳 各 一 件

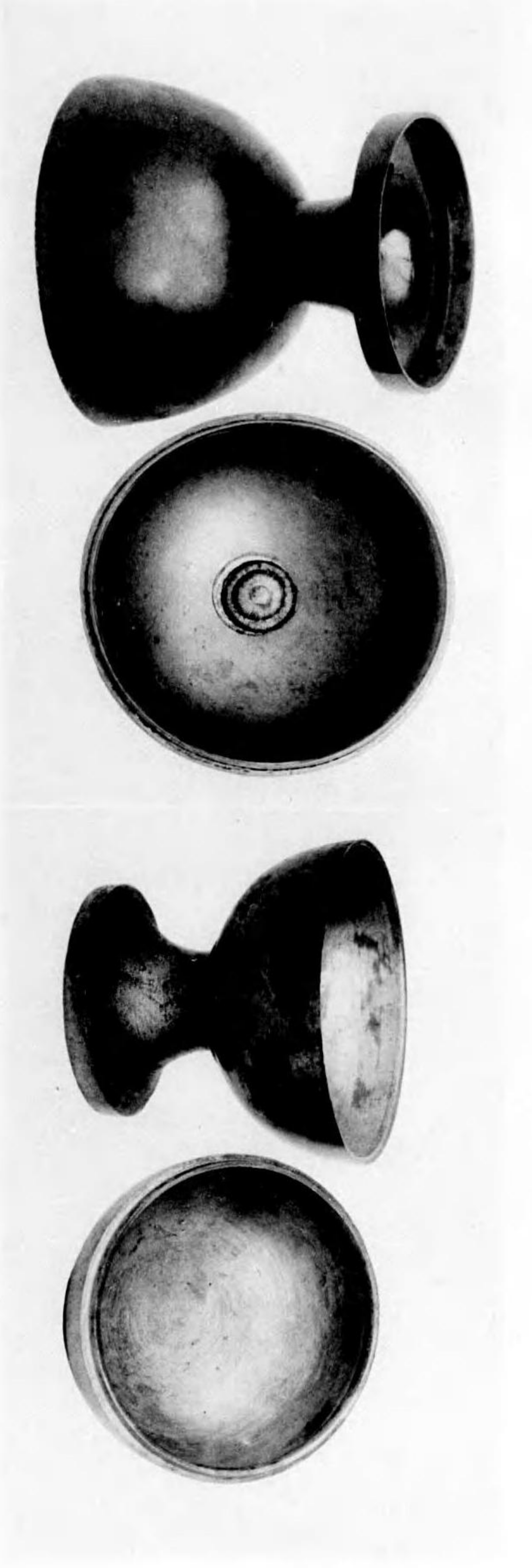
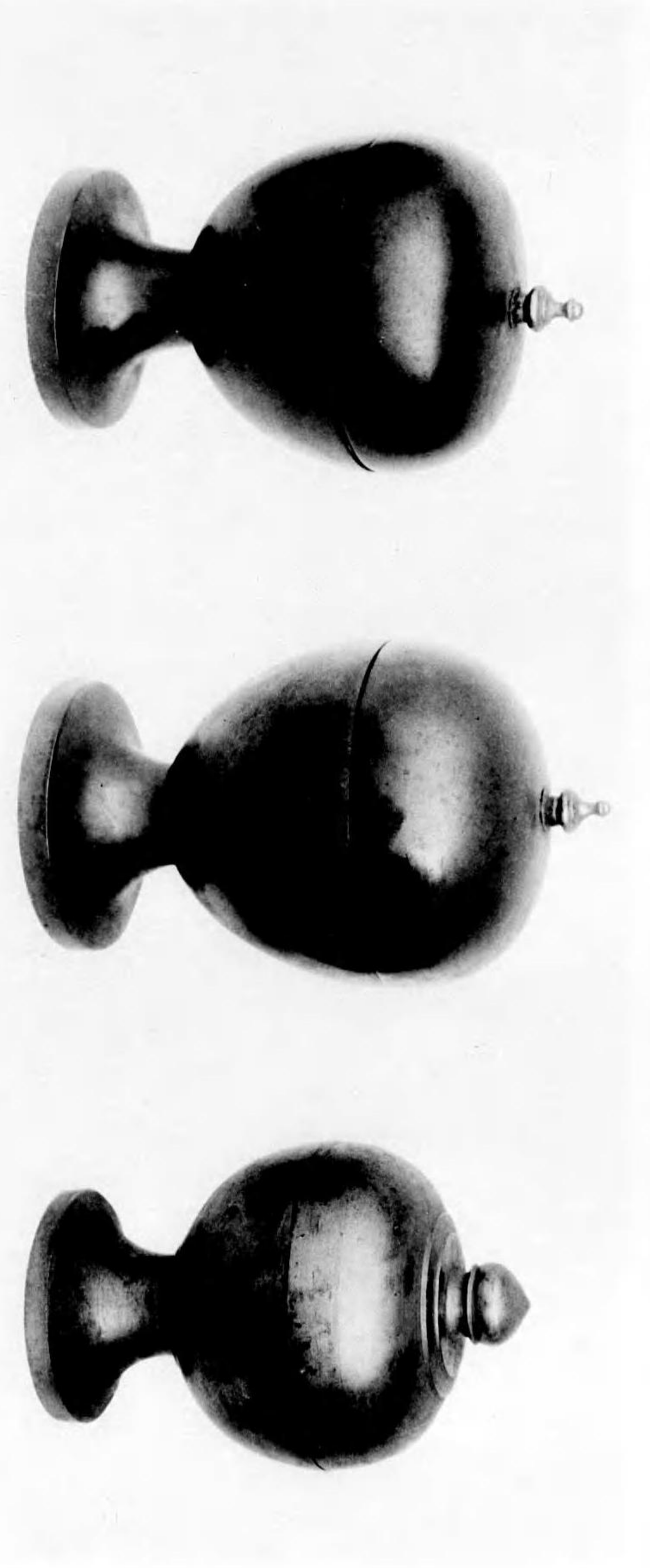
第一三號 新 六 號

第四十七圖 金 鳳 各 一 件

第一二號 新 三 號

本館所藏之金鳳，其形制與前代不同，蓋其體式較之舊式，更為圓潤，且其頸部之收斂，亦較為明顯。此等金鳳，其用途殆為禮器，或為宮廷中之陳設品。其裝飾之精細，實為前代所罕見。茲將所藏之金鳳，分列於後，以資考證。

第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十、第十一、第十二、第十三、第十四、第十五、第十六、第十七、第十八、第十九、第二十、第二十一、第二十二、第二十三、第二十四、第二十五、第二十六、第二十七、第二十八、第二十九、第三十、第三十一、第三十二、第三十三、第三十四、第三十五、第三十六、第三十七、第三十八、第三十九、第四十、第四十一、第四十二、第四十三、第四十四、第四十五、第四十六、第四十七、第四十八、第四十九、第五十、第五十一、第五十二、第五十三、第五十四、第五十五、第五十六、第五十七、第五十八、第五十九、第六十、第六十一、第六十二、第六十三、第六十四、第六十五、第六十六、第六十七、第六十八、第六十九、第七十、第七十一、第七十二、第七十三、第七十四、第七十五、第七十六、第七十七、第七十八、第七十九、第八十、第八十一、第八十二、第八十三、第八十四、第八十五、第八十六、第八十七、第八十八、第八十九、第九十、第九十一、第九十二、第九十三、第九十四、第九十五、第九十六、第九十七、第九十八、第九十九、第一百。



第五十圖 銀合子二合〔上〕(原寸大)

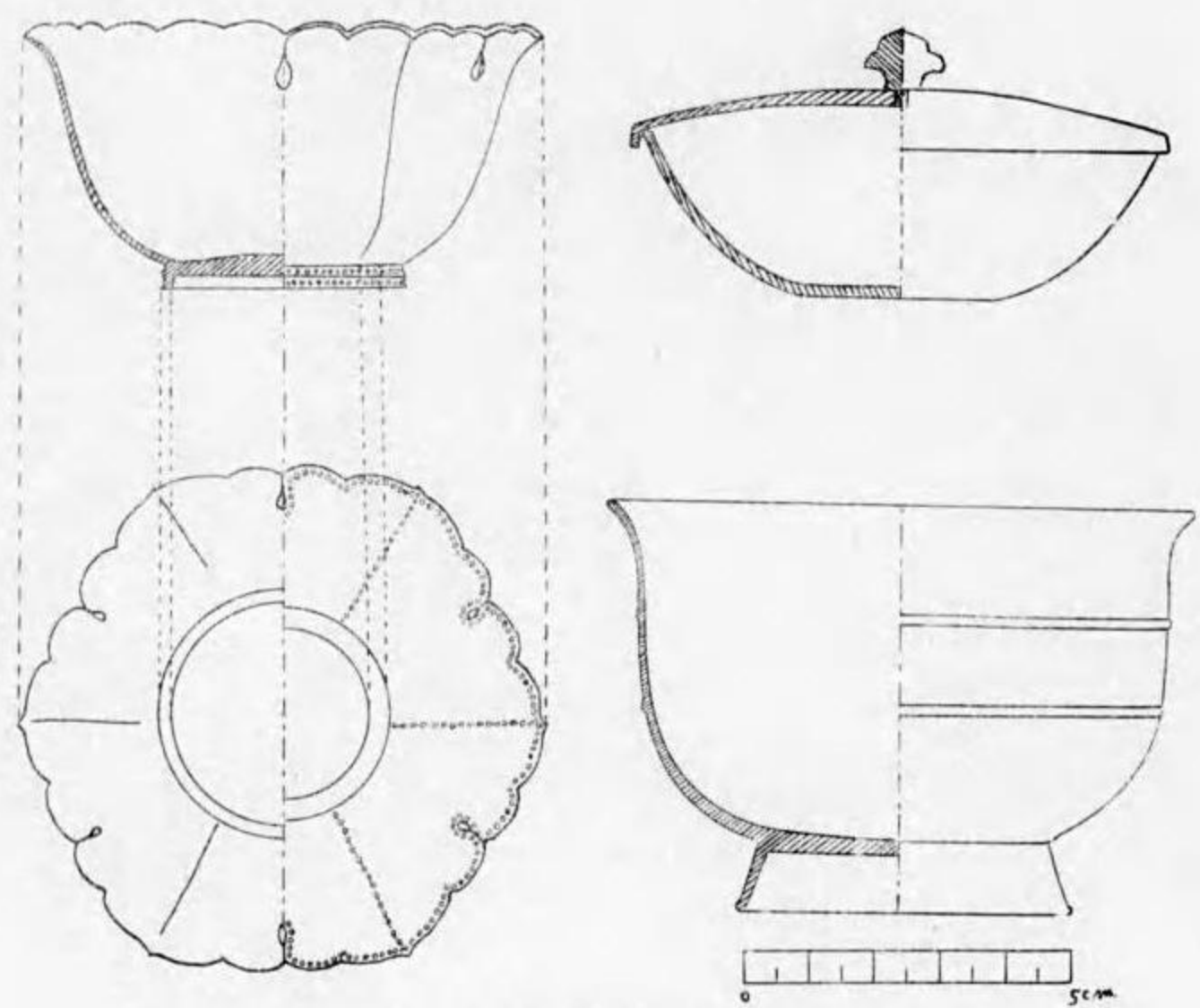
(右) 蓋徑 八二種 重 九七〇瓦
 (左) 蓋徑 八四種 重 九五〇瓦
 蓋だけが舊物で身は共に中倉銀合子(圖録七ノ十八所收)によつて後補せるものである。銀製の挽物で、鶏冠形の鈕をつけ、蓋裏に當つて「六兩一分」又「六兩二分」の墨書を残す。中倉合子の蓋の「五兩三分」なるに比べて、稍重い。

佐波理 鏡〔中〕(原寸大)

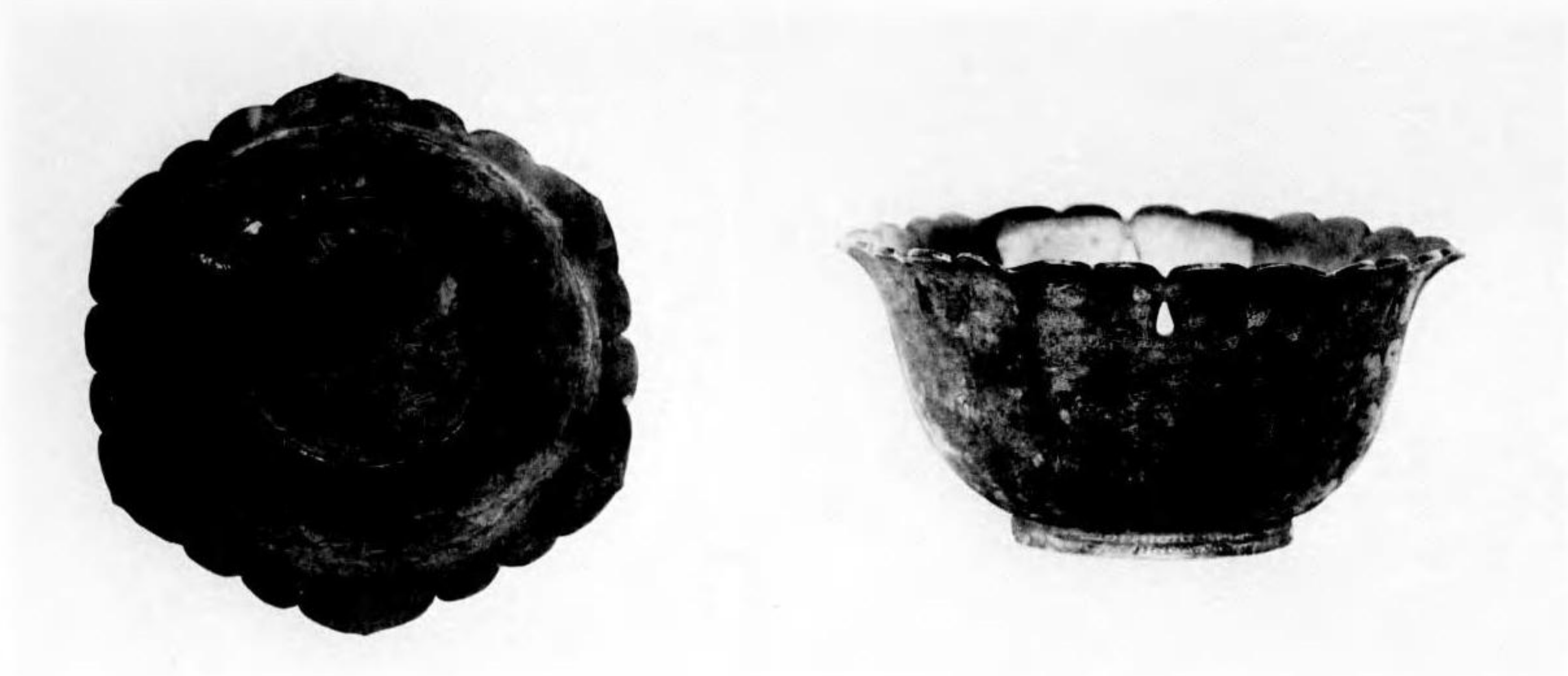
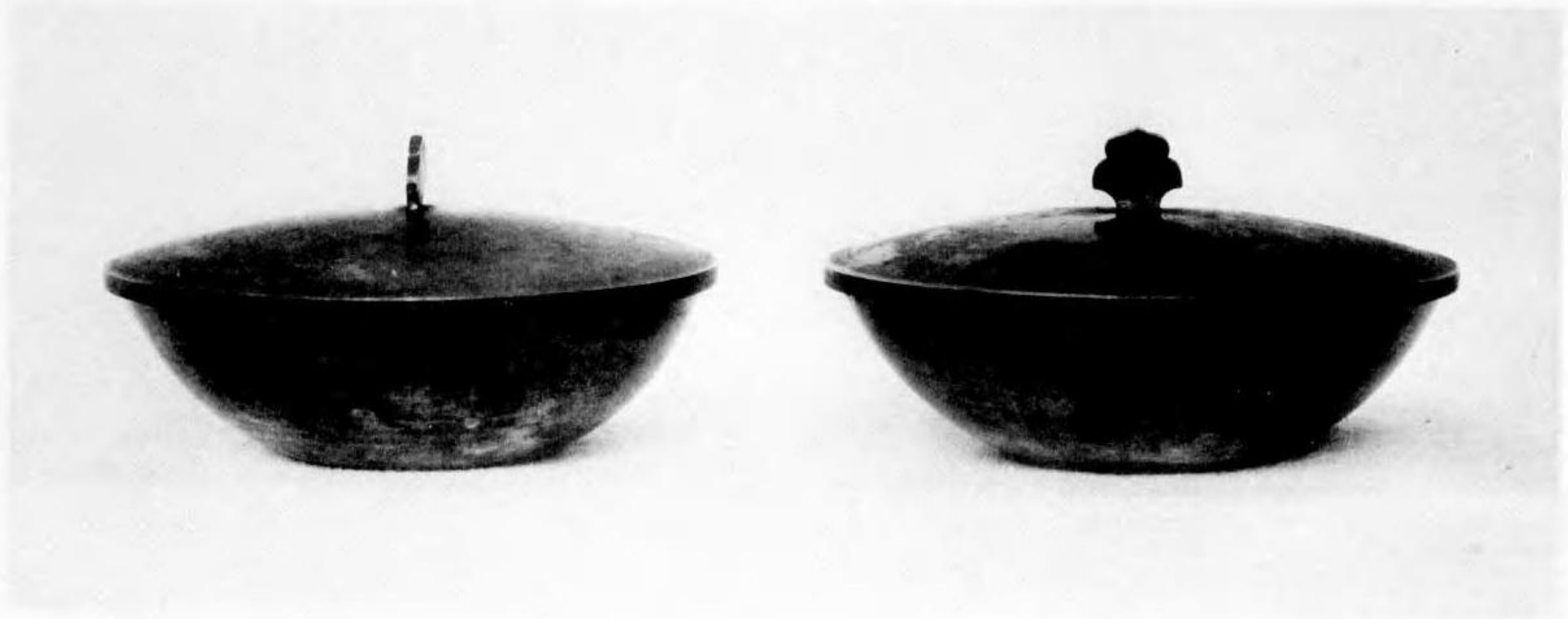
徑 九二種 高 六二種 重 一六〇〇瓦
 佐波理の挽物で、今黄白色を呈し、腹には二段の紐帯を作り、香臺は外に向つて張る。

金銅六花形坏〔下〕(原寸大)

口徑 八三種 高 四二種
 厚 〇二種 重 六五〇瓦
 金銅製打物で、六曲花形の口縁に近く六個の猪目をすかし、辨端には稜を立て、その外側から底裏にかけては魚々子地に花卉天人等の毛彫を施し、香臺には珠文を飾る。

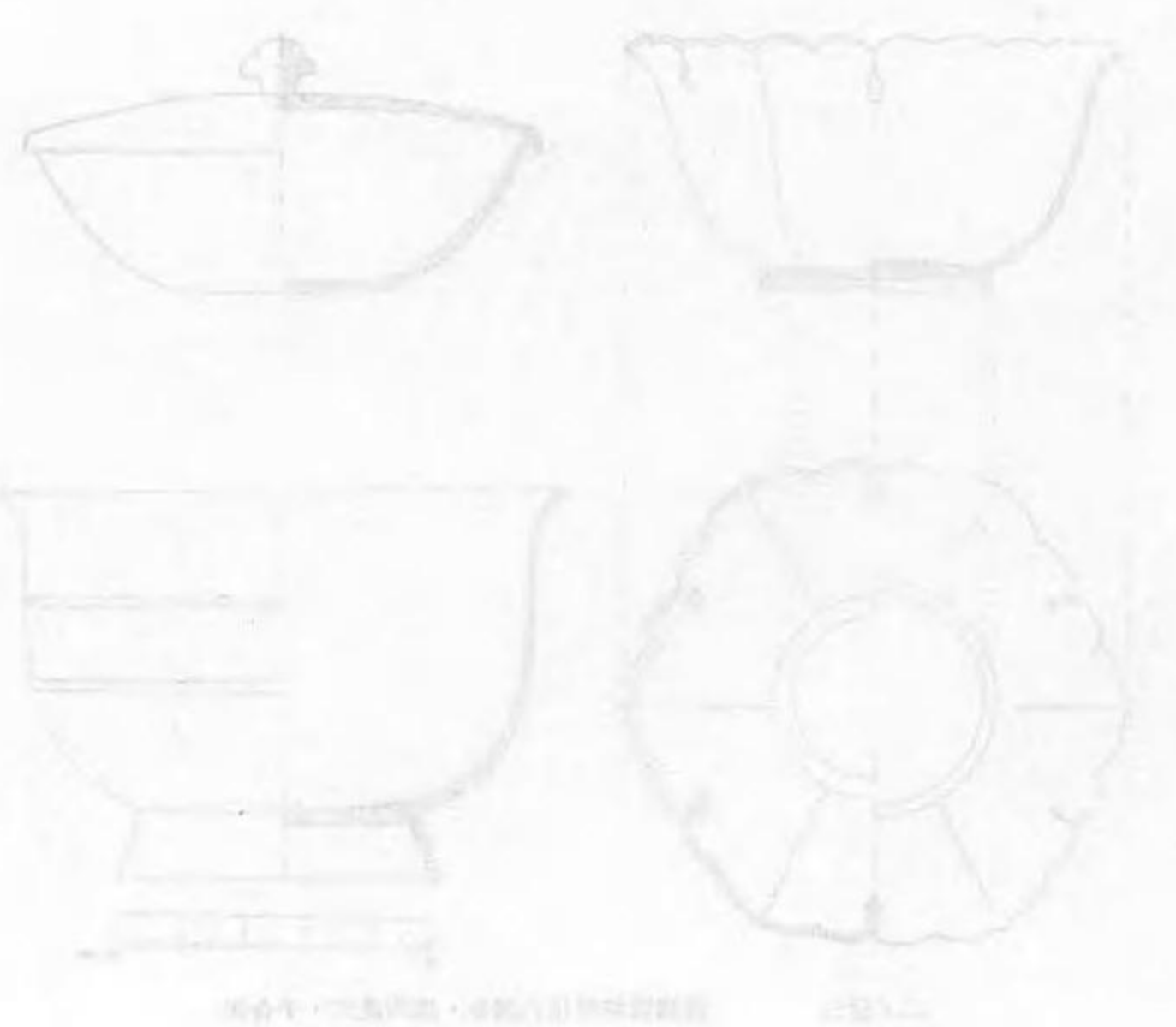


二ノ分三 圓潤實坏形花六銅金・鏡理波佐・子合銀



第五十圖 聯合午二合 (五) 蓋付

女子用
 丁以成子午與子未并次入夢の事...
 金銀六葉鉢...
 蓋付...
 式一 八三號 高 四二號
 式二 八三號 高 四二號
 式三 八三號 高 四二號
 式四 八三號 高 四二號
 式五 八三號 高 四二號
 式六 八三號 高 四二號
 式七 八三號 高 四二號
 式八 八三號 高 四二號
 式九 八三號 高 四二號
 式十 八三號 高 四二號



第五十一圖 金銅六花形環

三倍大

前掲六花形環の側と背とを二倍大に撮す。外底香臺内の文様は中心に八瓣花文を圖し、これより派生する八本の花枝をあらはしたものの、側面の毛彫は六稜に六株の花樹をあらはし、樹上の花座にそれ〴〵奏樂の天人を配したもので、花座の天人は或は笙を奏し琵琶を弾じ、或は横笛を吹き尺八を持ち、琴を弾き腰鼓を打つ。上圖は恰もその彈琴のところを出す。



第三十一圖 文鏡秘府論卷之六

此碗之形制與唐之金銀器無異，其口沿之飾，蓋仿唐之蓮花紋也。其底之飾，則似唐之蓮花紋，而較之更覺繁複。此碗之形制，蓋仿唐之金銀器，而其底之飾，則似唐之蓮花紋，而較之更覺繁複。此碗之形制，蓋仿唐之金銀器，而其底之飾，則似唐之蓮花紋，而較之更覺繁複。

第五十二圖 淺 型 花 筥

(箱三分一)

徑 四三六種 深 五七種

竹の表皮を去つたもので作る。その編み方は中央に一邊長一三〇種の方形を網代に組み、これを基本として最初は綾目に、次は一目宛に拾ひ、周縁は竹心を入れて矢羽形にかざり葛にて結ぶ。圖は籠の内面と側面とを示す。

御物にはこれと同形のもものが總て五百七口あるが、その底裡墨書より察して何れも散華供養の爲に用ひられたものと知られる。

第五十三圖 淺型花笥

(上縮寫二分一、下原寸大)

上圖は前掲花笥の背面、下圖は其の側面を原寸大に示す。尙此種の花笥五百七口の中には底背の墨書を略したもの、又墨書はあつても中央細代組の對角に書したもの、乃至墨書内容の異なるもの等もある。

第五十四圖 深形花宮

(上幅三分二、下幅五分ノ四)

〔上〕 徑 三六〇 深 一一・六
〔下〕 徑 二九五 深 一四・二

竹の表皮を去つたもので作り、その形は前掲五十二圖の花宮に比べて更に深形であるが、その編法は全く前者と同じである。上圖花宮底裡には「中宮齋會花宮天平勝寶七歲七月十九日東大寺」下圖の底裡には「東大寺花籬」の墨書がある。

因にこの宮の用途は前掲淺形のものとは稍異り「したみ籠」として生花を洗ふに用ひたもの、様である。御物中同形のもの五十八口を數ふ。

第五十五圖 花笥底裏墨書銘

(原寸大)

天平勝寶七歲七月十九日は聖武天皇御母皇太夫人宮子崩後の御一週忌に當り、天平勝寶九歲五月二日は聖武天皇崩御の御一週忌に當れば、それらの齋會に御使用の爲作成せられたものと知られる。「東大寺花笥」「東大寺花籬」については、使用の直接目的を詳にしないが、それらの中には大佛開眼會に使用されたものが多く含まれてゐるのではないかと思はれる。

尙墨書銘と籠の形式との關係を表示すれば次の如くなる。

墨書銘	淺形	深形	計
中宮齋會花笥、天平勝寶七歲七月十九日、東大寺 東大寺、天平勝寶九歲五月二日 東大寺花笥 東大寺花籬 無銘	八一〇 四一九 七	一五 三一〇 三九	一五 一一二 四一九 一〇九 五六五
(計)	五〇七	五八	五六五

第五十六圖 雜玉花筥二枚ノ一

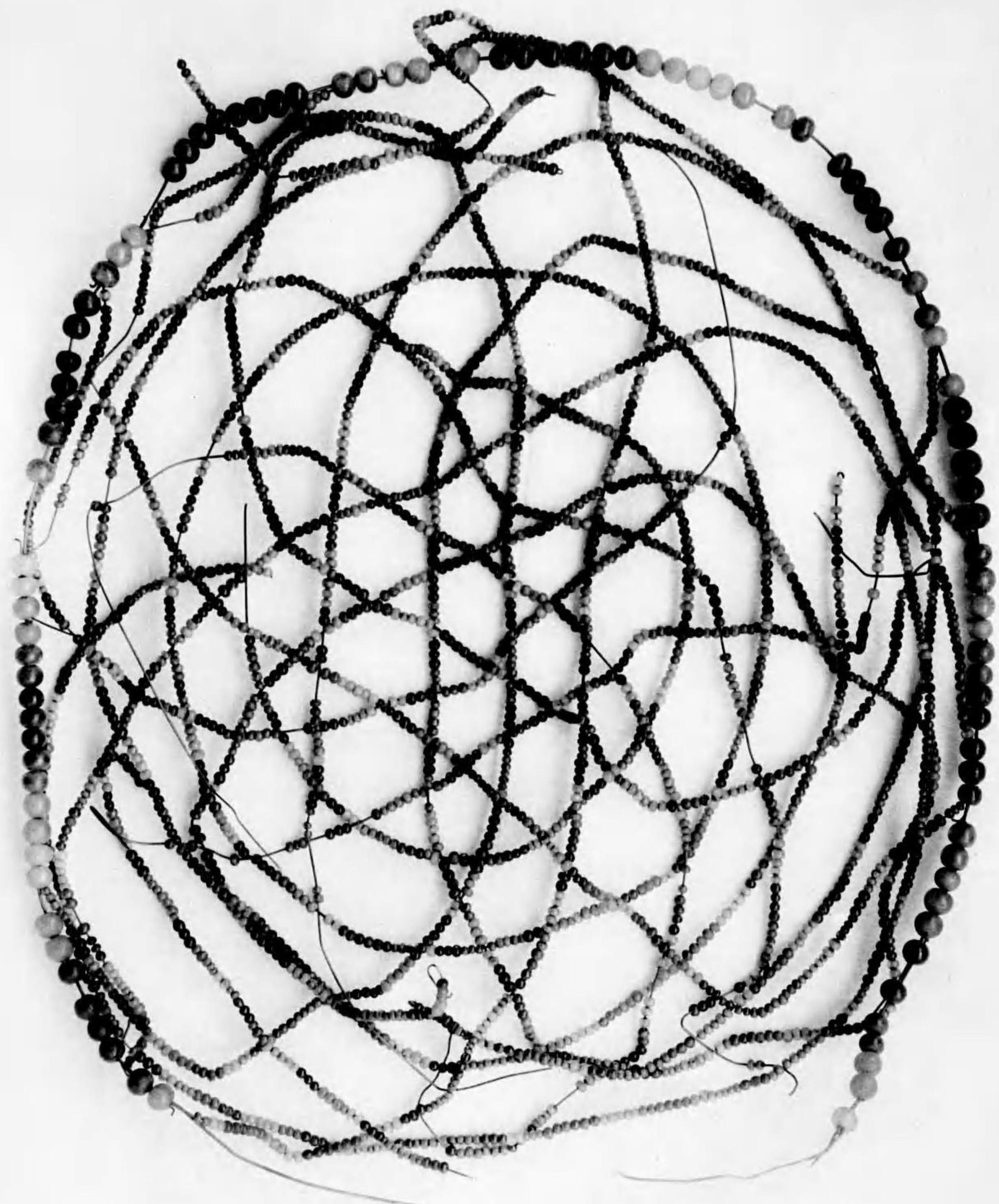
徑 二三・〇釐 重 一九〇・〇瓦

雑色の硝子玉を銀線に貫き、それを籠目に編んで花皿形にしたもので、使用の硝子玉には大小の二種類あり、大玉は周縁に用ひ、小玉は籠目編みに用ふ。而して其の色には縹・黄・褐・緑・黒の五色があつて、これを「縹・々・黒・々・縹・々・緑・々・黄・々・褐・黒・褐・黄・々・緑・々」等の暈網に並べてゐる。

第五十七圖 雜玉花筥二枚ノ二

徑 二五五釐 重 二一〇・〇瓦

材料、技工は前掲雜玉花筥と全く同じである。
蓋し前者と共に一雙として作られたものであら
う。



珠の一種 珠の一種 二珠の一種

珠の一種 珠の一種 珠の一種

珠の一種 珠の一種 珠の一種 珠の一種

珠の一種 珠の一種 珠の一種 珠の一種 珠の一種

第五十八圖 珠玉莊琥碧誦數 (第一號) (原寸大)

周圍長 八・八 繩

御府藏誦數の中最も優れたものである。琥碧玉百十九顆を白組緒に貫き、母珠には真珠を用ひ、その兩脇に珊瑚玉一顆宛を配す。又母珠よりは四條の白組緒をたれ、その二條には珊瑚と真珠、他の二條には珊瑚と紫水精玉とを貫き、母珠の反対側の所謂記子には真珠を用ひ水精勾玉を飾る。記子の數は二十一顆を算へ、その結元に當つて更に七顆の真珠を貫く。又記子より八顆を隔て、珊瑚管玉と紫水精玉四顆を貫いたものを結ぶ。母珠の珠房、管玉勾玉の莊は、共に誦數として他に類例の無いものである。

第五十九圖

琥 碧 誦 數

(第二號) (繪寫三分ノ二)

周圍長 七四・〇種

現に百六顆の琥碧玉を貫ぐが、元は百八顆のものであらう。母珠には水精玉を用ひ、それより二條の組緒を出し琥碧玉各五顆づつを貫き、記子としてゐる。

琥 碧 誦 數

(第三號) (繪寫三分ノ二)

周圍長 八八・〇種

琥碧玉百七顆、水精玉一顆とを貫き、記子を缺くが、母珠の反對側に白緒を結び、水精玉一顆を通してゐるのは稍注目する。

琥 碧 誦 數

(第四號) (繪寫三分ノ二)

周圍長 八八・〇種

總べて琥碧玉を用ふ。通珠百七顆、之に大母珠、小母珠を貫き、大母珠よりは記子を派生させてゐる。記子は各條五玉を貫いたらしいが今その一條を失ふ。又記子と母珠との間に淨名珠を存してゐるのは最も誦數の制規にかなふ。

琥 碧 誦 數

(第五號) (繪寫三分ノ二)

周圍長 一一五・〇種

凡て琥碧玉、通珠百二十七顆、母珠一顆を貫き、母珠の對角に別に一珠を結ぶ。紙箋あり「大會後物入々獻物」と墨書す。大會とは大佛開眼會の事か。



大倉後物 人乙献物
大倉後物 人乙献物
大倉後物 人乙献物
大倉後物 人乙献物
大倉後物 人乙献物
大倉後物 人乙献物
大倉後物 人乙献物
大倉後物 人乙献物
大倉後物 人乙献物
大倉後物 人乙献物

第六十圖 琥

碧

誦

數

(第六號)

(繪寫三分ノ二)

周圍長

九〇・〇種

通珠は琥珀玉百七顆、大小母珠には水精玉を用ひ、且つ大母珠には別に琥珀玉一顆を副へ、又小母珠より四顆を隔て、記子一連を結ぶ。記子には雜色組緒を用ひ、琥珀玉五顆を繋ぐ。

琥

碧

誦

數

(第七號)

(繪寫三分ノ二)

周圍長

八七・〇種

通珠、母珠共に琥珀玉を用ひ、母珠よりは二條の記子を派し、各條五顆の水精玉と露玉とを着け、又母珠の對角にも露玉を具する水精房玉を結ぶ。露玉の金具は銀製、通珠の數は現在百六顆を算へる。

琥

碧

誦

數

(第八號)

(繪寫三分ノ二)

周圍長

九二・〇種

琥珀玉百六顆を貫き、母珠を用ひず。白組緒の端を除して房を作る。

琥

碧

誦

數

(第九號)

(繪寫三分ノ二)

周圍長

九四・〇種

琥珀玉百二十四顆を貫く。第八號と同様、母珠を用ひず。白組緒の端を除して房となす。

第六十一圖 琥 碧 誦 數

周圍長 八五・〇種 (縮寫三分ノ二)

總て琥碧玉を用ひ、通珠百七、母珠一顆よりなる。母珠よりは二條の記子を派生せしめ、各條四珠を貫く。

琥 碧 誦 數 (第十一號) (縮寫三分ノ二)

周圍長 五九・〇種

通珠百七顆、母珠一顆、共に琥碧玉を用ひ、記子には瑪瑙・瑠璃・紫水精玉を混ぜ、その露には金銅金具をかざる。

琥 碧 誦 數 (第十二號) (縮寫三分ノ二)

周圍長 七九・〇種

全部琥碧玉を用ひ、母珠一、通珠百十五顆を算へ、記子を缺く。

琥 碧 誦 數 (第十三號) (縮寫三分ノ二)

周圍長 七二・〇種

通珠には百二顆、母珠には一個の琥碧玉を貫き、記子には水精玉を用ふ。記子は母珠より二條の白緒を出し、各條紫水精玉五顆と金銅の金具ある白水精露玉一顆とを着く。又母珠の對角には紫水精の玉房をかざり、中途に橋夫人奉と墨書する木牌を結ぶ。

又此珠の傍に「お美水珠の正装なり」と、中巻の御夫人様と稱する大珠が挿入。
 一、二珠の白珠を出し、赤黒珠水珠正装の金具も白水珠正装一珠とす。
 一、二珠の白珠を出し、赤黒珠水珠正装の金具も白水珠正装一珠とす。

珠 保 福 遊 (第十二巻) (赤黒珠)

全形正装正装の、珠一、銀珠百十五粒正装(、珠正装)。

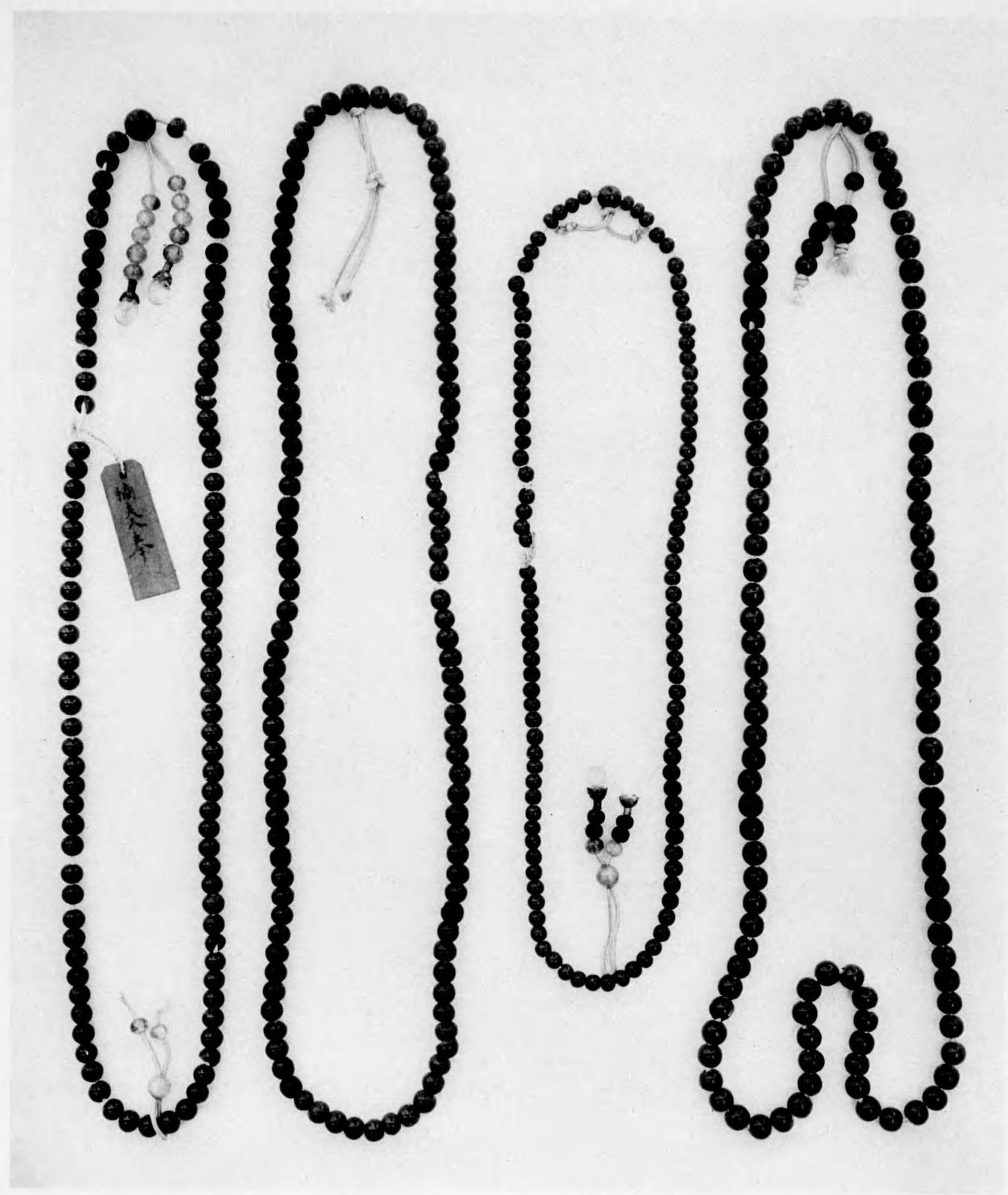
珠 保 福 遊 (第十二巻) (赤黒珠)

全形正装正装の、珠一、銀珠百十五粒正装(、珠正装)。

珠 保 福 遊 (第十二巻) (赤黒珠)

全形正装正装の、珠一、銀珠百十五粒正装(、珠正装)。

第六十一圖 珠 保 福 遊 (第十巻) (赤黒珠)



第六十二圖 雜

玉

誦 數

(第十四號)

(縮寫三分ノ二)

周圍長 三四・〇種

母珠一、通珠三十六を算ふ。三十六顆が百八顆の三分の一に相當する事は注目し、母珠は琥珀、通珠に白水精と琉璃玉とを間隔的に配し、母珠とその對角には各二條の玉房を飾る。母珠の玉房には水精瑩玉と琉璃丸玉、その對角の玉房には水精の根じめに琥珀六角切子玉と琉璃丸玉とを用ふ。この誦數には「雜玉 不知獻者 會日」と墨書ある紙箋を殘し、もつてこれが大佛開眼會當日の獻物なるを知る。

水 精

誦 數

(第十五號)

(縮寫三分ノ二)

周圍長 六六・五種

通珠百八顆、母珠一顆よりなり、記子を用ひず母珠よりたゞの組緒二條を垂る。

水 精

誦 數

(第十六號)

(縮寫三分ノ二)

周圍長 八一・〇種

通珠百八顆、母珠一顆、母珠よりは二條の組緒を出し、各條五顆の記子と金銅莊の水精瑩玉とをつく。

第六十三圖 水 精 誦 數 (第十七號) (縮寫三分ノ二)

周圍長 七五・〇厘

通珠百八、母珠一顆、母珠よりは金銅莊露玉のある十顆の記子を出す。

水 精 誦 數 (第十八號) (縮寫三分ノ二)

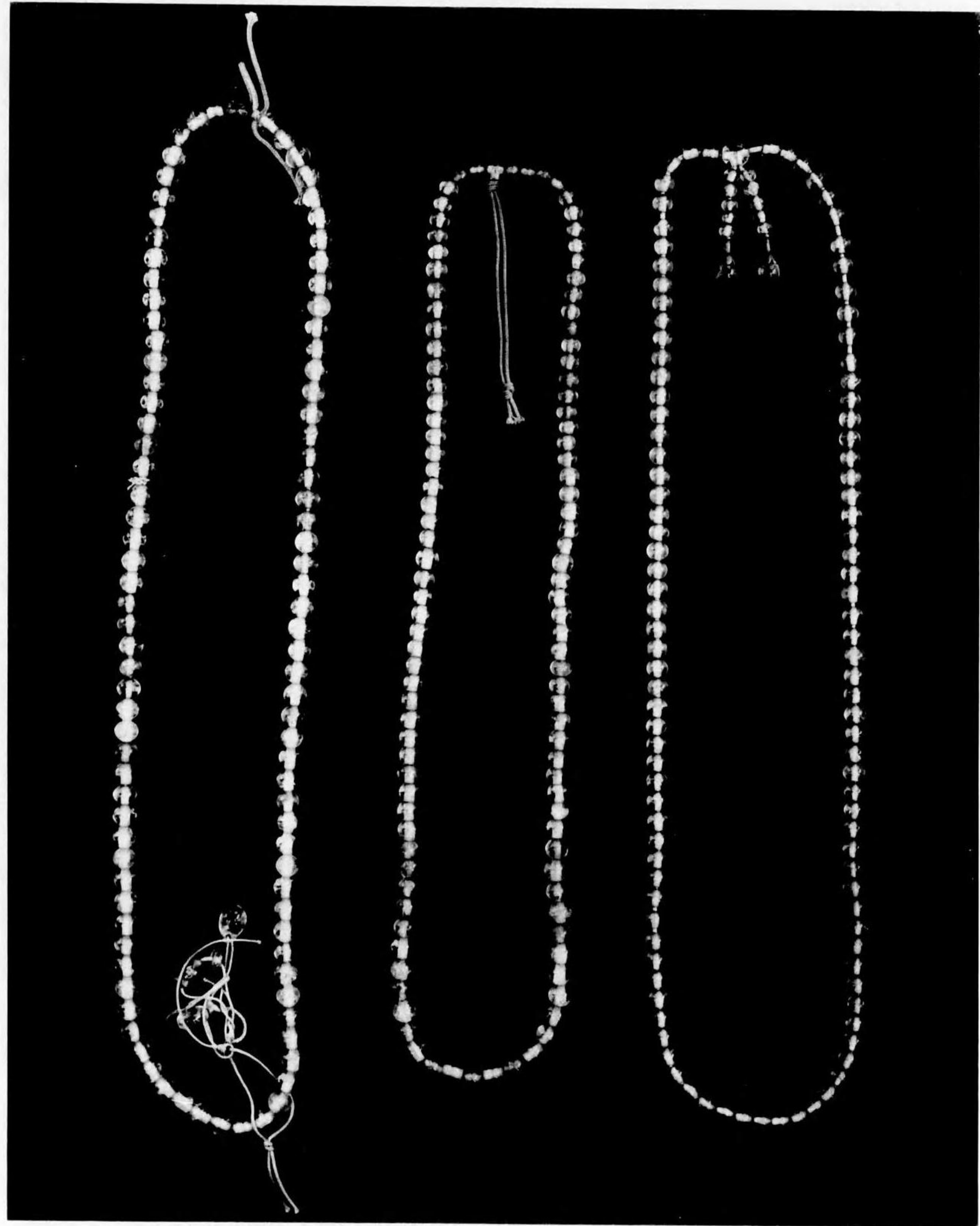
周圍長 七〇・〇厘

通珠百八、母珠一顆、記子を具せず只母珠より二條の白緒を出す。

水 精 誦 數 (第十九號) (縮寫三分ノ二)

周圍長 七七・〇厘

通珠百一顆、母珠を缺く。又記子殘缺と思はれる水精玉六顆を添ふ。



第六十三圖 水 帶 飾 珠 串 飾 珠 串 飾 珠 串

此項飾珠串，係由大小不一之珠串成，其珠之大小，約在二至五毫米之間，其珠之形狀，有圓形、扁形、長形等，其珠之顏色，有白色、黑色、紅色、藍色等，其珠之質地，有珍珠、珊瑚、琥珀、水晶、玻璃等。

水 帶 飾 珠 串 飾 珠 串 飾 珠 串

此項飾珠串，係由大小不一之珠串成，其珠之大小，約在二至五毫米之間，其珠之形狀，有圓形、扁形、長形等，其珠之顏色，有白色、黑色、紅色、藍色等，其珠之質地，有珍珠、珊瑚、琥珀、水晶、玻璃等。

水 帶 飾 珠 串 飾 珠 串 飾 珠 串

此項飾珠串，係由大小不一之珠串成，其珠之大小，約在二至五毫米之間，其珠之形狀，有圓形、扁形、長形等，其珠之顏色，有白色、黑色、紅色、藍色等，其珠之質地，有珍珠、珊瑚、琥珀、水晶、玻璃等。

第六十四圖 菩提子誦數 (第廿號) (縮寫三分ノ二)

周囲長 八八・〇糎

通珠には菩提子百八顆を貫き、母珠と記子には紫水精玉を用ふ。記子の露玉には金銅装金具を飾るも今其の一個を失ふ。

白檀誦數殘缺 (第廿一號) (縮寫三分ノ二)

通珠二十顆のみ残る。舊目錄には菩提子誦數殘缺とあるが、實は白檀誦數殘缺である。

菩提子誦數殘缺 (第廿二號) (縮寫三分ノ二)

菩提子四十六顆を存す。

菩提子誦數殘缺 (第廿三號) (縮寫三分ノ二)

通珠十八顆を残す。其の形質第廿、第廿二號のものに比べてやゝ異り、これこそ今いふ菩提子に近い。

琥碧誦數殘缺 (第廿四號) (縮寫三分ノ二)

琥碧玉九顆のみ残る。

蓮子誦數 (第廿五號) (縮寫三分ノ二)

周囲長 一五四・〇糎

蓮實百四顆を一連に貫き、母珠を設けず、別に小蓮實十顆を添ふは記子にでも用ひたものであらうか。

第六十五圖 柳

箱 [上] (原寸六)

[蓋] 豎横 九四種 高三四種

[身] 豎横 八六種 高三六種
橋夫人奉納の琥珀通數(第十三號)を納めたもので、蓋表には紙箋を貼つて「琥珀通數一條納物」又蓋及身の柳縁には「東大寺會前」とそれ／＼墨書す。製作は今の柳行李と同様に編み、内に紙襯を具す。紙襯の立紙には紫紙、敷紙には淺紅紙を用ふ。

漆 皮 箱 [中] (原寸六)

[蓋] 豎 一一〇種 横 七五種 高三七種

[身] 豎 一一五種 横 七〇種 高三七種
第十五の水精通數に附屬の箱で、今大破するが、皮に黒漆を塗る文字通りの漆皮宮である。但し縁は麻布を貼つて厚くしてゐる。

龜甲形漆箱 [下] (原寸六)

[蓋] 長徑 一一九種 短徑 九八種 高三八種

[身] 長徑 一一二種 短徑 九〇種 高三八種 總高 五六種
龜甲形の面をとつた楕圓形の箱で、第一號通數に附屬し、其の蓋表には「琥珀通數一條納物」と墨書した紙箋を貼る。製作の技法所謂漆皮箱の如くであるが、所々漆のはげて布目に見えるのは、材を麻布にとつたものか。

第六十六圖 漆花形箱十口ノ内(原寸)

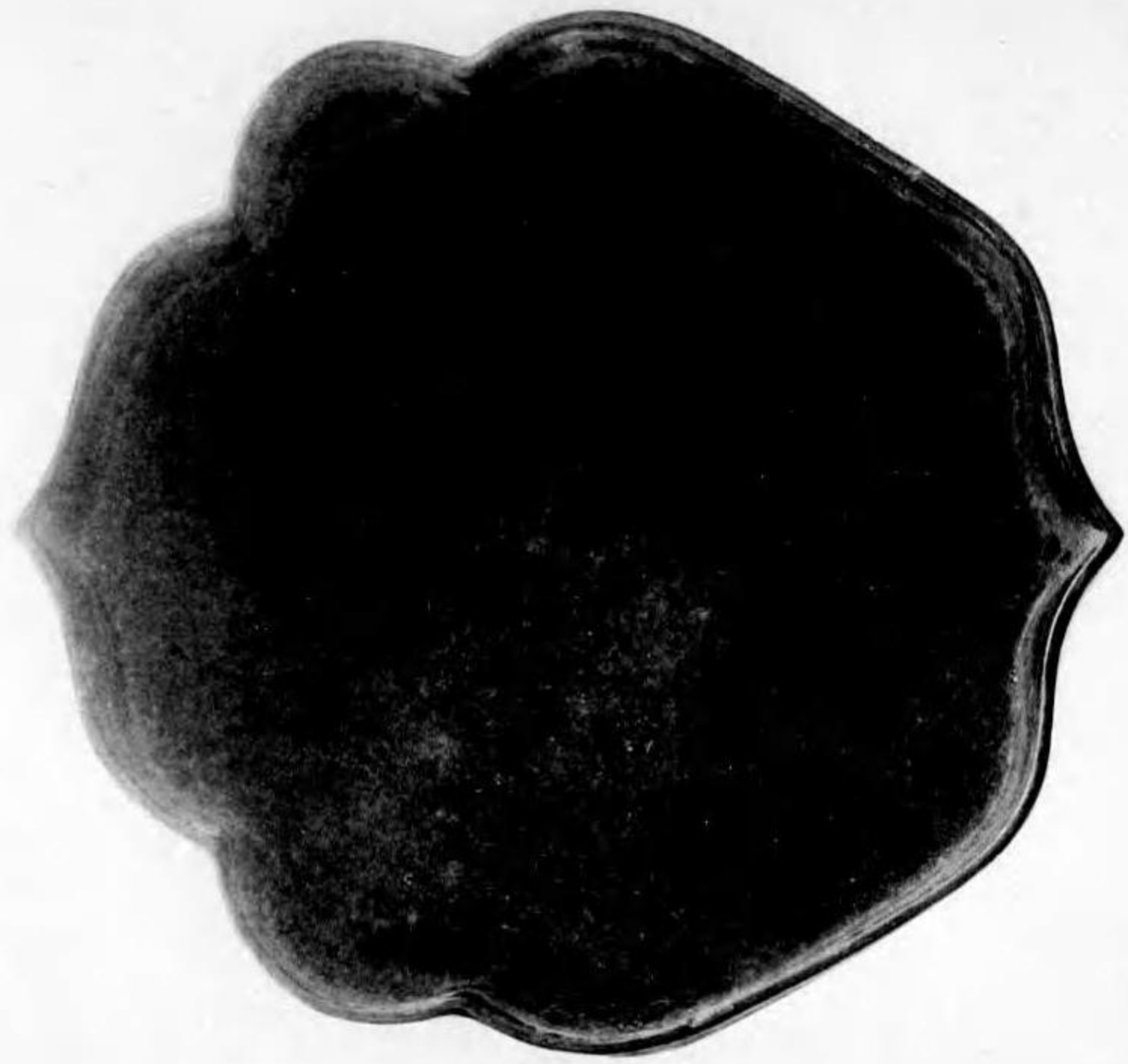
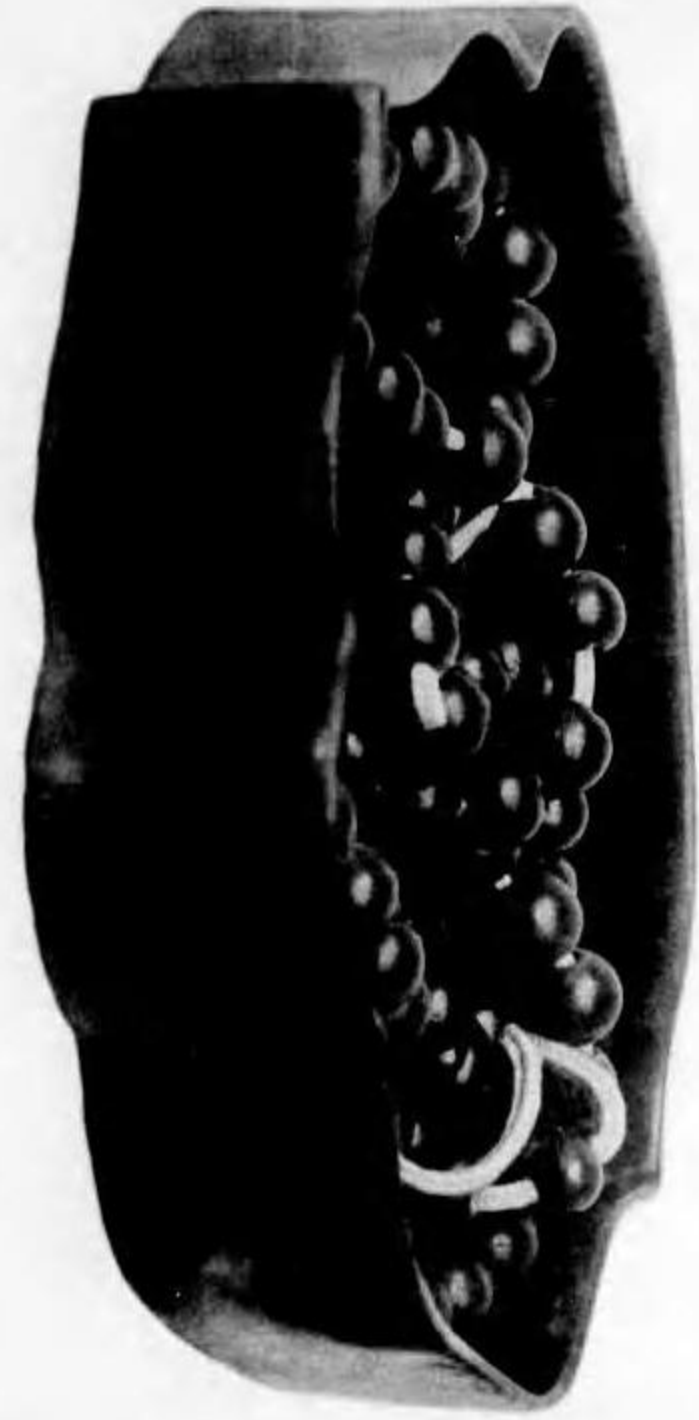
右 堅一三〇細横二二八種 高二五種

左 堅一三〇細横二二三種 高二五種

右圖は花舞形をなし、左圖は漣葉形をなすが、共に木の曲物に麻布を張り、上から黒漆を塗つたもので、何れも蓋を缺き、その背面にはそれ／＼「飛」の一字を朱書してゐる。「飛」字に缺いては、それは何を意味するか不明である。上圖は漆花形箱の二種の俯瞰、下圖はその各に調数を納めたところを示す。

尙漆花形箱十口の内花舞形のもの

八、漣葉形は二口である。



八、 照圖畫自二口全也。

其形與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

與前同，惟口內有珠，其珠之數，

圖式十六圖 第五號第十口之內也

第六十七圖 柳

箱 (原寸大)

〔蓋〕 徑 一四〇榿 高 二七榿

〔身〕 徑 一三〇榿 高 二八榿

前掲第六十五圖の柳箱と同様、被蓋の小箱で、その製作も所謂行李編みによるが、彼の方形であるに對し、これは圓形である。且つその柳縁には「納真珠箱」の朱書銘があり、誦數箱となす前にはそれが真珠の容器であつた事を知る。

赤 漆 柳 箱 (原寸大)

〔蓋〕 堅 二〇〇榿 横 一九〇榿 高 四〇榿

〔身〕 堅 一九〇榿 横 一八〇榿 高 四五榿

方形被蓋の小箱で、編み方は前掲のものと同じであるが、これには朱漆を塗る。誦數箱と傳へ白紙の襷を入れる。

昭和十四年十二月二十日 印刷
昭和十四年十二月廿八日 發行

第拾貳輯【定價金貳拾五圓】

帝室博物館

【不許複製】



E708 17092
SH96 K49
(12)



終

